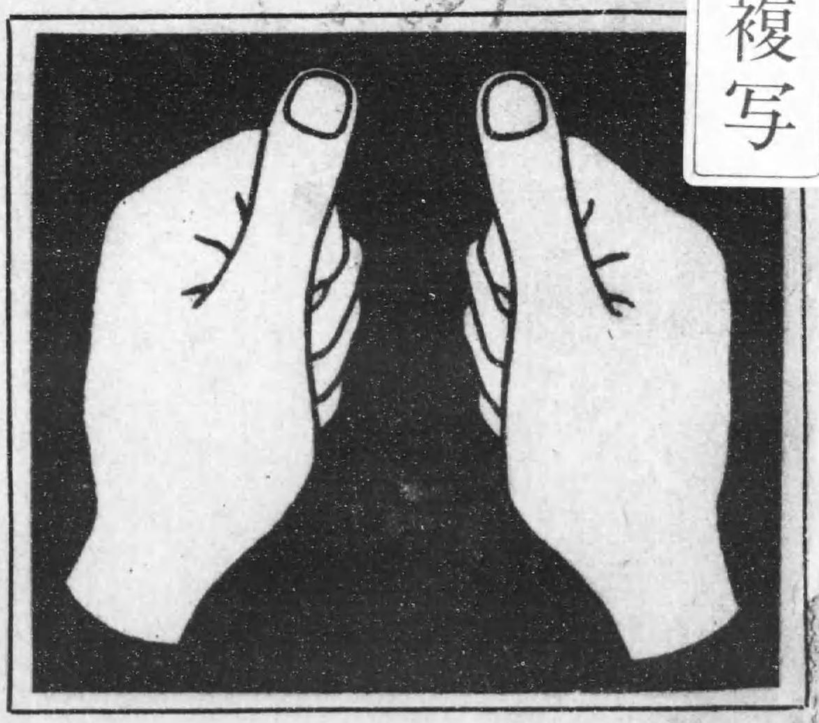
特216
621

圖解說明
無藥醫術

指壓療法秘傳書

X
複写



東京指壓療法學會編

始

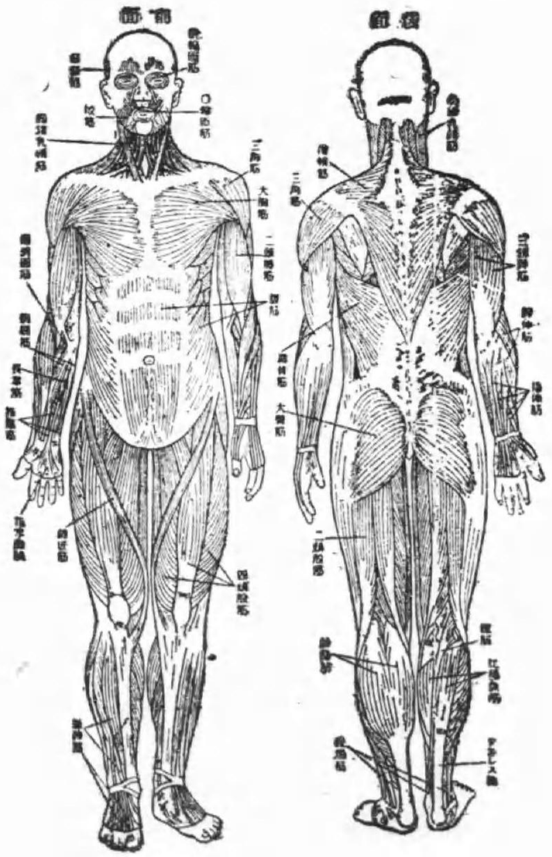
特216
621

圖解說明
無藥醫術

指壓療法祕傳書

東京指壓療法學會編

昭和十五年



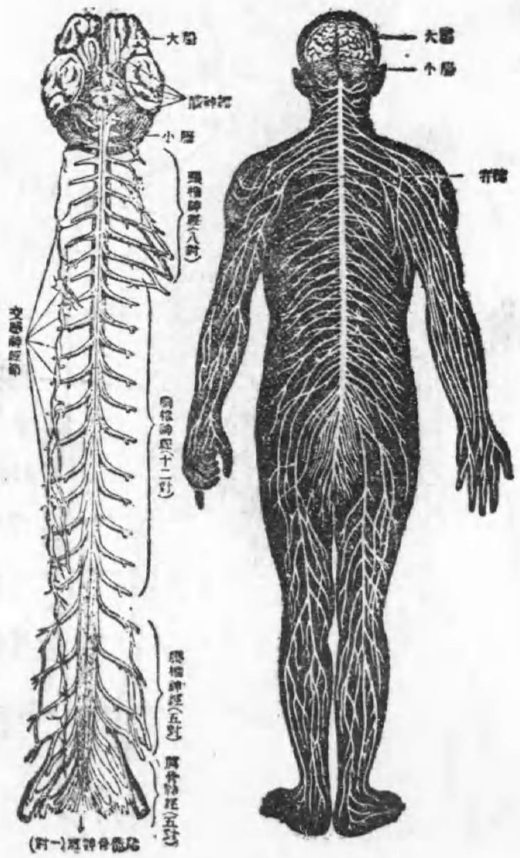
筋肉

推　薦

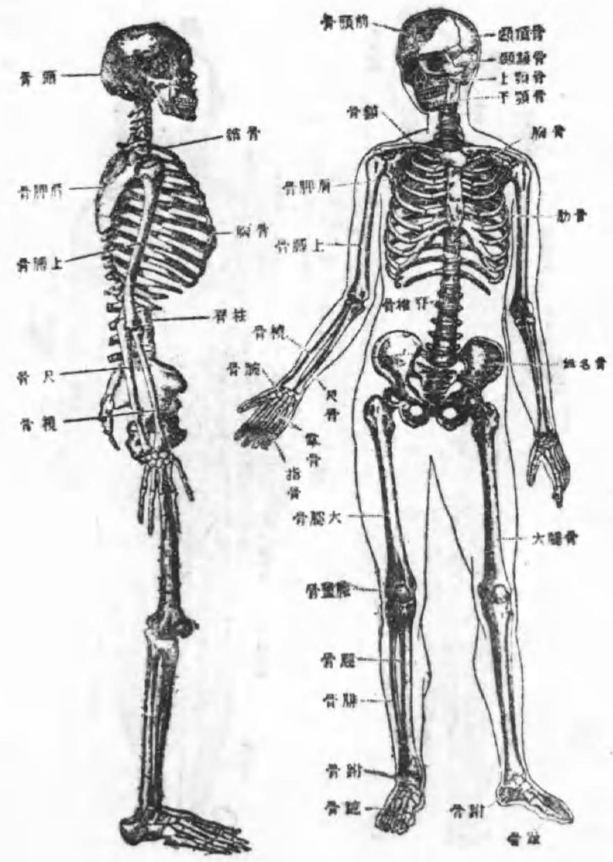
醫學博士　泉　彪　太

近時、醫家ならざる所謂素人連に依る何々療法とか稱する、インチキ療法が巷間夥しく流行してゐるが、それらは素より信を措くに足りないが東京指壓療法學會の指壓療法に限つては斷然之等と類を異にしてゐると信ずる。何となれば同療法は醫學的見地から見ても頗る合理的な根據を有してゐるからである。

敢て醫家の立場からして、一言推賞の辭を述べる次第である。


大腦
小腦
腦神經
小腦
頸椎神經(八對)
胸椎神經(十二對)
腰椎神經(五對)
腐骨神經(五對)
(對一)腐骨神經
大腦
小腦
脊髓

全身の神經系


骨頭
鎖骨
骨肩胛
骨肩上
骨橈
骨尺
骨腕
骨頭蓋
頭骨
顎骨
上顎骨
下顎骨
骨鎖
胸骨
骨肩胛
骨肩上
肋骨
骨脊柱
骨橈
骨腕
尺骨
掌骨
指骨
骨盤
骨大腿
骨膝蓋
骨脛
骨腓
骨跗
骨蹠
大腿骨
骨跗
骨蹠

骨　　髓

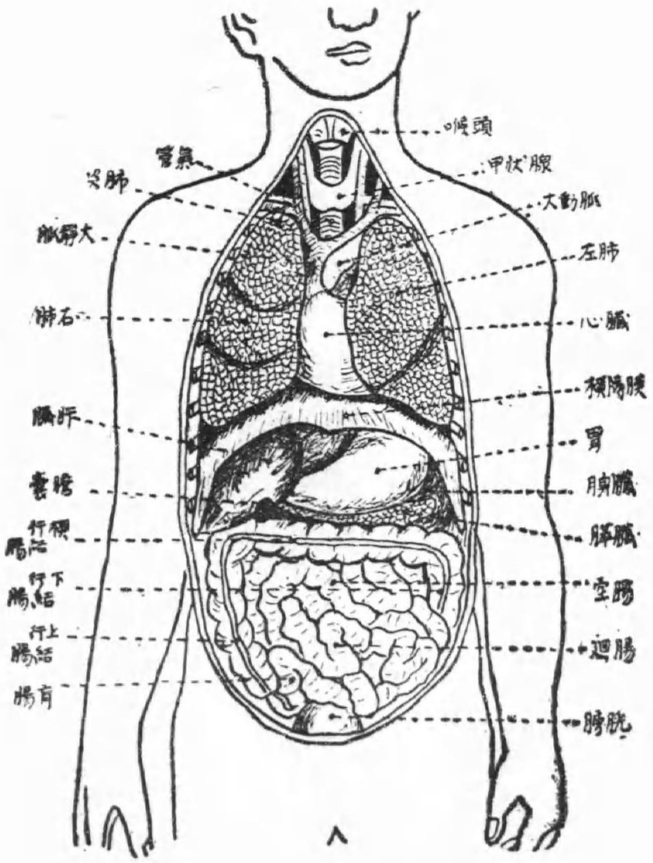
無藥醫術

指壓療法秘傳書

目次

第一章 總說

第一節 人生と健康……二
第二節 指壓療法とは何か……四
第三節 藥物は人體に無害であらうか……六
第四節 藥物療法は過去の遺物……八
第五節 指壓療法は治療界の花形……一一
第六節 奇蹟か當然か……一三
第七節 併用療法としても最適……一五
第八節 國民の常識として心得置くべきもの……一七
第九節 指壓療法の特色……一八
第十節 指壓療法の沿革……二一



臟　　內

第十一節　一元二面論と快泉式指壓療法……二八
第二章　指壓療法原理……三一
第一節　疾病治癒の主體……三一
第二節　自然良能に就て……三五
第三節　疾病の根本的原因……四三
第三章　指壓治療法手技……四八
第一節　指壓法……四八
第二節　壓迫法……五〇
第三節　押壓法……五三
第四節　摩擦法……五四
第五節　敲打法……五五
第六節　微振法……五六

第四章　全身一般指壓法及檢査……六八
第一節　腹部……六八
第二節　胸部……七〇
第三節　頭部及顏面……七二
第四節　後頭部頸部肩部肩胛部……七三
第五節　背椎部……七六
第六節　上肢……七七
第七節　下肢……七七
附　背椎單位診斷法……七八
第五章　精神力應用法……七九
第一節　自力精神治療法……七九
第二節　他力精神治療法……八〇

圖解說明
無藥醫術

指壓療法秘傳書

小にしては個人の幸福、大にしては國家の隆盛も倶にその基礎を個人の健康に俟たねばならないことは今更と新しく申迄もありません。されば本書一卷により一人でも多くの醫藥で効果のない御氣の毒な病者が疾患根治され、活動の原動力である健康を恢復して幸福を增進し延いては幾分にても國家の發展に貢献するところがあるならば本會の望外の悦びとするところであります。

東京指壓療法學會編者識

目次　をはり

第六章　指壓適應症……八一
第一節　適應症……八一
第二節　難病がどの位の日數で全治するか……八二
第七章　秘圖說明……八七
第一節　秘圖の見方と注意……八七
第八章　秘圖朱點……九一

第一章　總　説

第一節　人生と健康

昔秦の始皇帝は不老不死の仙藥を探るため、其臣除福に命じて蓬萊島に派したが、遂にその歸るを待たずに薨逝したと云ふ。吾人は素より永劫の生命不老不死を欲するが如きは、空想であり妄想であるのは勿論であるが、誰か人と生れて健康を望み長壽を欲せぬ者があらうか、身體の健康、心の平安、而して衣食住に憂ひなからん事、これは人生幸福の三大要素にして、此中一つでも失へば勢ひ他に影響して吾人の生活の平安を覆すに至るのである。然し心の平安も衣食住の全からんことも、結局は健康によつてかち得られるものであるから、人生の最大幸福は何と云つても健康であらねばならない。素より運不運數奇なる運命の流れに

浮ぶ吾人の一生は、何人にも豫測することは不可能ではあるが、然し努力の効も空しからず求めて得られぬことはない筈である。幸なることに吾人の身體中には凡ての幸福を振出す打出の小槌とも云ふべきところの……健康、其健康を維持し又たとへ如何なる疾病に冒されてもそれを恢復して再び健康とならしめる……靈寶を有してゐる。故にこの靈寶の活用如何により、病者は健康を恢復し、健康者はより以上に健康となり、從つて心の平安も富も名譽も其他、凡ての希望を實現し、幸福を增進することが出來るやうになれるのである。されど、哲人嘗て諷して曰く『水中の魚が渴したりと聞かば、汝は笑はん、されど汝は、汝の身に具はれる無上の寶を知れりや、空しく之を抱いて幸福に渴する事なきか』と、抑も無上の寶とは果して如何なるものか、何人も起つてその所在に着目することは、眞に疾病を根治し、健康を保持增進し、幸福を齎すべき本道へ踏出す第一歩である この一卷の指壓療法秘圖はこの靈寶の最も完全巧妙なる活用術である。

第二節　指壓療法とは何か

現今世界に治療法を尋ねるならば、其の數其の種類各種各樣實に夥しい程多數に上るであらう、然しながら是等の療法が直接病氣を治癒せしめるものと考へる者があるならば、それは大なる誤解である。疾病を治癒せしめるの主體は、人類が既に發生と同時に大自然から授與された、自然良能の作用に外ならないのである。つて、療法は唯それを補助として働くに過ぎないのである。曾て醫學博士原榮氏は其著『自然療法』に曰く、『生物殊に人間の身體には、侵襲を受ける外敵に對して、これを驅除する自然的療能が存してゐます。慢性の疾病が屢々自然的に治癒する動機は此療能の作用でありまして、其偉大なる作用には到底醫師の及ぶ所ではありません。それで慢性疾患殊に肺結核症の如きは其療養上病者は何物よりも身體に存する自然の良能に信賴しなければならぬと云ふ事を私は玆にお話した

いのであります。私は敢て奇を唱ふる者ではありません。自然の療能に倚賴すると云ふ事が、人類健康增進上並に療病上の根本である事は、今日普ねく醫師の腦裡に浸みこんでゐなければならぬに拘らず、醫師の側に此觀念の必要を說く人が誠に少ないのは不思議と云はねばなりません。寧ろ醫師でない人から(中略)種々の積極的療法が起つて來て、社會の一部に歡迎せられてゐる今日の現象の半面には一般社會の知識の進步は、從來醫師が世俗に對してゐたやうな千遍一律の陳套なる消極的衞生法にあきたらずして絕えず或る新たなるものが要求せられつゝあることが窺はれます。私は此要求は生存競爭の盛なる現代の樣な社會では必然のものであると信じます。又將來の健康法治療法は一大革命の時機に遭遇しなければならぬものと信じます。今日は實に寧ろ醫師社會の覺醒を促すべき時期であります』と云つて此自然良能の偉大なる作用を力說せられてゐる。指壓療法は一口に云ふと自然醫學に立脚し、强弱緩急自由自在靈妙なる調節力を有する指

壓の技術により、理學的法則主として解剖學、生理學、物理學、心理學等の法則に準據し、此自然良能作用を保健治病の主體となし、之を保護誘導促進し、而して病根を驅逐し、人體をして本然の能らきに復歸せしめ、以て健康を恢復せしめるの現代療法の尖端を行く、科學的根本的の新治療法である。

第三節　藥物は人體に無害であらうか？

人生とは不歸の旅行であります。搖籃より墳墓に至るまでの人生と云ふ變化極りない旅行である。だから誰でも此の旅行を最も幸福に愉快に且つ安全に有益なものとしたいと切望するのは人情であらう。それには先づ何よりも身體の健康を保持することが肝腎で、それに對する適當な案内者が必要である。

現今の醫學は日進月歩止る所を知らぬ程發達して來たと云はれてゐる。だが然し之は又何と云ふ皮肉なことであらう、醫學の進歩に反比例して次第に人間の壽

命が縮まるとは、神武天皇時代には誰でも百歳以上生きたといふに、現代の日本人の平均壽命はタツタ四十二歳といふ誠に情けなさではないか。之には幾多の理由があらうが、其の大半は藥物療法の缺陷ではあるまいか、即ち一般世人は一度病氣に罹ると一にも藥二にも藥と藥ばかりを服むが、果して藥物は、人體の保健に効のみあつて無害なものであらうか、先づ藥物其の物に就て考へて見るに、第一之には種々なる副作用の伴ふものが尠くないのである。例へば從來無害な催眠藥として廣く賞用せられて居つた「ズルフオナール」は、現今に於ては有害なものとして取扱はれる樣になつた。之は唯に「ズルフオナール」のみでなく、市場に販賣されてゐる藥物中には、なか〳〵斯ふいふ例は多いのである。それ故醫師は處方するに當つて、成るべく副作用を起させないやうに色々と工夫を凝しては居るが、果してそれで滿足して、天上天下唯だ一つしかない最も貴重な生命を、かうした藥物のみに任せられ樣ふか。

第四節　藥物療法は過去の遺物

藥物療法は前世紀に發達せる物質醫學の所產であつて、病氣は藥で治るものと思つた時代は、現に過ぎ去りつゝある。何か藥以外に優秀な療法はあるまいかと暗夜に物を索るやうに絕望的悲痛な思ひをして病床に伸吟しつゝある病者は、餘りに際限ない程澤山有り過ぎる。それは金にあかして藥を浴びる程飲んでも、一向利き目がないからで、事實的確に効果のある藥は僅に指を屈する程しかないことは旣に專門の醫學博士が發表して居るところではないか、又藥物による對症療法は啻に効果が薄弱なばかりでなく、動々もすれば大なる障害を釀す場合が多いのである。それもその筈で一局部に作用する程ならば必ず全身に影響して居るわけであり、局部に有効ならしめるために、他の局部に對して明かに有害な事を知りながら飲む場合もある。例へば淋藥を服用して胃腸を害する等はその適例であ

らう。其の他の藥物も大低は一方によければ必ず他方に惡影響を及ぼすのが普通で、その爲め思ひも寄らぬ苦しみを受けることが尠くないのである。彼のモルヒネ中毒患者の如き好箇の適例ではあるまいか。また胃病に多く用ひられる彼の稀鹽酸、ペプシン、苦味丁幾等の如き溫和性の藥物でも、服癖がつくと、元々吾々の身體にある胃酸や膽汁のやうな苦味質は分泌せぬ樣になつて、遂には永久的にこの藥を服まなければならないやうな所謂惰性と云ふものがついて來る。又吾々には藥を服めば服む程キカナクなる性質がある。之れを醫學上習慣性といつて居る。要するに藥物には副作用、惰性、習慣性等の大なる缺點を有して居る。慢性病の場合長期間に亘つて藥物使用した結果、病氣が治るどころか一層惡化したり或は他の部分が侵されたりするのは、畢竟右の理によるものに外ならないのである。故に根强い病氣を完全に治すには、藥物以上大なる自然の力を俟つの外絕對に道がないのである。文豪國木田獨歩は、其の病床錄に『藥品を以て疾病を治せ

んとするは少くとも不自然なり。醫師を去つて鳥は如何にして癒へ、魚は如何にして治するやを究めよ。そこに必ず自然最良の方法あらん。學術は彼等を神に背かしめたり』と申して居る。流石に獨歩はその當時に於て、既に藥物萬能を排擊して、人體自然の力を信じたものと思はれる。分り易い話が肺病は藥では治らない、醫學博士原榮氏は其著「肺病患者は如何に養生すべきか」に『肺結核に偉大なる力を持つた治療藥新注射藥は一つも現在にないことを、學理上から、實際上から何れの點から觀察しても決して間違のない炳然たる事實であると斷言されてゐる』と云はれて居る。結局美味しいものを澤山食つて海岸の樣な所に轉地するに限るとは、醫者も病者も知つて居ることであつて、强いて藥を服めばそれは肺病藥ではなくて何ぞはからん强壯劑である。要するに人體に榮養を與へ新鮮なる空氣を充分吸つて身體の根本を培い、諸器官の機能を旺盛ならしめて黴菌を殺すより外には全く道がないことを、醫者も病者も認めて居る證據である。古諺に

も一に看病二に藥と申して居る樣に、ありとあらゆる病氣はすべて藥物だけで治ると思ふのは大なる間違と云はねばならない。此の間違に氣附かない病者は御氣の毒ながら何時迄も有り難くない病氣と仲を良くしたい人と云つても過言ではあるまい。私は藥物療法殊に慢性病に對しての藥物療法は、過去の遺物として葬り去られ人々に顧みられない時代が必ず來ることは、さして遠い來將でないことを確信する者である。

第五節　指壓療法は治療界の花形

私は徒に藥物療法を攻擊して快とするものでは決してなく、寧ろ一層の發達進歩を希ふものであるが、遺憾ながら現在の所では此療法に双手を擧げて贊成する譯には行かない。何とならば此藥物療法は慢性病に對しては其効果殆ど行詰りの觀がある。其實證には藥を浴びる程服用しても病氣が治らず、樂しかるべき

人生を陰鬱な病床に横たはつて、悲嘆の涙に暮れてゐる氣の毒な病者が餘りにも澤山居り過ぎる。之は敢て私が說明しなくとも讀者諸君の御手近かにかうした實例が必ずあることゝ信ずる。

然し勿論之を其儘捨てゝは置けず之等氣の毒なる人々を救ふため、種々なる新療法や治療器等が次から次と考案され、民間療法の盛な時代は蓋し當今の如きはないのである。一口に民間療法と云つても、其種類は千差萬別枚擧に暇ない程であるが、其中で最近異常な發展をなしつゝあるものは、吾人の指や掌を用ひて病氣を治す無藥療法で、就中指壓療法それである。私は指壓療法を以て現今民間療法界殊に無藥療法界の中心をなすものであり、王座を占めるものであり、花形であると思ふ。

第六節　奇蹟か當然か

かく云ふと、指壓療法を未だ知らぬ人は我田引水、自己稱讚の譏りを放たれる人もあらうが、之には確固たる根據を有してゐる。先づ第一に此指壓療法は科學と體驗に基礎を置いた根本的の治療法であると云ふことである、仰故根本的の療法であるかと云ふことは後章に述べるが、兎に角疾患の根本的原因に深く立入つての療法で、疾患を治癒する上に於て絕對無上の偉力を持つ天賦の自然癒能力を最も完全に刺戟し振興せしめる療法であるため、其効果は誠に驚異すべきものがある。例へば三年間寢たつきりの中風患者が、三十回の治療で歩行自在となつたり、數年間苦んだ喘息が、僅かに一回にて其發作が止つたり、胃下垂で常に下垂帶を使用せねばならなかつた青年が、三十回の治療で全治して下垂帶の必要がなくなつたり、手の擧らぬ老人が忽ち自由に擧る樣になつたり、十數年の座骨神經痛で苦んでゐた老婦が、十七回の治療で忘れた樣に全治したり、動脈硬化で頭痛耳鳴り、肩の凝り、歩行不安の症狀のあつた壯年が、僅か三回にて耳鳴りは完全

に除かれ、頭痛や、肩の凝りは減じ、二十一回にて全治したり、脚氣にて仕事などは手に着かず、年中家事は女中任せにし、己は常に室内にのみ、ゴロ〳〵してゐた中年の婦人が、僅か六回にて身體の倦怠はとれ、愉快に針仕事などする樣になつたり、呼吸器疾患のため數年間苦んでゐた青年が三十二回で全治し、涙を流して喜んだり、重症の神經衰弱で會社を辭職し、靜養中にあつた青年が、二十一回にて全治し以前に増して元氣となり、再び會社に入り職務に精勵出來るやうになつたり、胃腸病で常に粥食より出來なかつた老人が、十二回で健康體となり、鰻丼を二人前も平げて平氣となつたり、其他かうした實例は枚擧に暇ないが、何れも之等の人々は藥物療法は勿論、殆どあらゆる療治をしても其甲斐なく、最後の試みとして私の所にお出になられた方々ばかりである。

以上は殊更ら匿名したが、私が直接治療して全治した實例の僅に一部であり、又私から指壓療法の教授を受けた方々で、特筆したい全治實例を持つて居られ

る方が澤山あるが、かうした事を書きたてることは、徒に手前味噌を並べ紙面を費すのみであるから省略するが、讀者諸君の中には之だけの例によつても指壓療法の効果の顯著なることは、奇蹟的であると思はれる方があらうが、私をして云はしむれば別に奇績でも何でもなく、いやしくも療法と名稱を附したる以上、此位のことは當然の結果であらねばならないと思ふ。唯だ世間に行はれてゐる多くの療法が、名稱は療法でも其實績が擧らぬため、指壓療法のみが奇蹟的の効果がある如く思はれるのであらう。

第七節　併用療法としても最適

指壓療法は治療界の花形である理由の一として、科學と體驗に基礎を置いた根本的の治療法で、効果が頗る顯著であると云ふことは只今述べたが、第二には此療法は單獨に施しても勿論宜く、卽ち以上に述べた如く獨特の偉効を奏すること

が出來るが、又他の療法と併用して施しても良いと云ふことである。如何なる治療法を併用しても少しも弊害はなく、否寧ろ第二の治療法の効果を一層倍加的に顯著ならしめる特殊の作用があることである。例へば電氣療法なり、精神療法なり、又は鍼灸療法、藥物療法、其他の療法なりをなす人々は、先づ最初に、指壓療法を施して、然る後電氣療法なり精神療法なり、或は鍼灸療法、藥物療法、其他の療法なりを施すならば、第二の療法のみを施すに比して比較にならぬ程顯著偉大な効果を擧げることが出來る。之は決して私が誇張して云ふのではない。百の空論よりも一の實驗に如かず、讀者諸君は一度之を實驗せられたならば、私の言の僞りならざることを知るであらう。

最近の療術界を見るに、自己の行ふてゐる療法に此指壓療法を併用する療術家が日一日に增加して行く傾向は、何より雄辯に此事實を物語るものではあるまいか。實に指壓療法は醫術の基礎となるものである。故に指壓療法以外の他の療法

を行ふ人々で、未だ指壓療法を併用されてない方は是非之を研究し併用されて、自己の現在なし居る療法を一層權威附け、治病保健の目的を完全に達せられんことを國家社會のため切望するものである。

第八節　國民の常識として心得置くべきもの

第三の理由としては指壓療法は民衆的國民的の療法であるからである。即ち指壓療法は何等の設備も一錢の費用も要せず、他の療法の如く高價な藥や機械器具等の必要は勿論なく、誰でも親から讓り受けた指掌によつて治療することが出來家庭療法として行ふ程度ならば、百人が百人、萬人が萬人必ず誰にも出來る簡單容易な療法である。此普遍性が指壓療法をして民衆的國民的の療法たらしめる素因をなすものである。ブルジョア階級の人々が病氣をした場合には病院に入院するなり、轉地療法をするなり、又は食養生をするなり、何れにしても充分なる

療養が出來るが、若し之が國民の大部分を占めるプロレタリヤ階級の人々であつたならばどうであらうか、さもなくても不況の折柄生活難に脅されてゐる今日、其の家族の中誰かゞ病氣になると云ふことは、誠に病者自身の不幸は云ふ迄もなく、一家の經濟の破綻生活の脅威でなければならない。此場合家庭のうち誰かゞ指壓療法を心得て居たならば、最も經濟に最も完全に安心して治療することが出來るから、正に指壓療法は國民の常識として心得置くべきものだと思ふ。

第九節　指壓療法の特色

指壓療法の特色利點として數へるべきものには澤山あるが、其主要なものを摘記すると左の如くである。

一、家庭療法として行ふ程度ならば、老若男女何人にも容易に學び得られ、且つ實地に行ひ得られる。

二、之を職業とせんとする場合には本會の通信講義錄に依つて僅か二ケ月にて卒業全國何處にでも開業出來、何人にも人を助け、己を救ふ、最も有意義な職業を獲得することが出來、人に尊敬されつゝ生活の安定が得られる。

三、一錢の費用も要せず、最も經濟的に、而も簡單に病氣を治療することが出來る。

四、たとへ健康者でも月に數回行ふことは、一層健康を增進し疾病を未然に防ぐことが出來る。即ち指壓療法は治病法であると共に健康法ともなり、病氣の豫防法ともなるものである。

五、發病の初期に於て行ふならば、一二回の治療で全治し、病名を附するに至らずして濟む。

六、既に病氣に侵されてゐるものは、藥物療法などに比し治癒速かにして且つ効果的確である。

七、殊に醫藥で効果のない慢性難病に對して、驚く程の効果を齎すことが出來る。

八、此療法を心得てゐるならば、夜間或は車中路傍又は旅行中等にて突發的に病氣が起つた場合至極便利である。

九、親が育兒上に應用して多大の利便がある。

十、一般に老齢に至るに從ひ身體に故障の起り易いものであるが、指壓療法を知つて居れば直に其故障を除去することが出來るから、長壽を全ふすることが出來る。

十一、夫の病氣を其妻が、妻の病氣を其夫がと云ふ樣に治療することは經濟上の利益は勿論の事、夫婦や親子の情愛を濃やかにし、家庭の圓滿を期する上に有利な方法となる。

十二、最後に特筆したいことは効果と經濟の點に於て、國民の大多數を占めるプ

ロレタリア階級に多大の福音を齎すことである。

第十節　指壓療法の沿革

指や掌を以て治す療法は最近始まつたものではなく既に遠き古來から行はれて來たものである。例へば釋尊、クリスト等の大宗教家が其手を病者の患部に觸れたのみにして立所に難病を治したと云ふ偉大なる指頭の靈力は別としても、往昔土耳古ハレム宮殿三千の美妃は朝夕化粧時の一刻を頸部の指壓によつて美容を保ち、千古傳統的の若返り法として實行されつゝあつたとか、古代のボベミヤ人は脊柱の異狀より病氣の起ることを知り、暴食後苦痛を感ずる時は掌や膝頭を以て第五胸椎を壓迫して治したとか、又我國に於ても手當とか手當法などゝ云ふ言葉をよく使用するが、この語の起原を考ふるならば遠き昔から疾病治療の際、手を使用したものであらうことは想像するに難くはない。又武道の救急法として

絶息したる時第三胸椎を手による强壓により蘇生せしめる所謂背活の法や、其他支那、印度、南洋各地の民間療法として頸部、肝臟部、內股等の指壓により、諸病を全治する法、又獨逸、希臘、埃及、ボベミヤの骨療法等の如き、種々なる方式により宗教家に又は家傳法として常に行はれて來たものである。然し是等は別に醫學的知識によりて發見されたものでなく、偶然の體驗とか又は神秘的の靈知によりて創始されたものである。其後醫科學的に研究されて來たのであるが、今を去る約六十年程前から米國ドクトル・アンドリユー・テーラー・スチル氏のオステオパシー（Osteopathy）（骨柱治療法）、米國醫學大家ドクトル・デデ・バーマー氏のカイロプラクチツク（Chiropractic）（脊柱調整法）、米國スタンフオード大學教授アルベイト・エブラム博士のスポンデイロテラピー（Spondylotherapy）（脊髓操作療法）、其外ライト博士のラディカルテクニツク（Radical technic）（根原療法）ノツクストーマス博士のナチユラパシー（Naturapathy）（自然療法）等の理學的療法

が發達し、最近獨逸、佛國等に於ても盛に研究される樣になり、今や世界醫療界の革命を來さんとしてゐる。

現在米國に於てこの種療法の最も勢力ある代表的のものは、何と云つてもオステオパシー、カイロプラクチツク、及びスポンデイロテラピーの三つであらう。そこで是等の三療法に就て概說することにする。

オステオパシー。オステは希臘語で骨と云ふことでパシーは病理學と云ふ意味である。即ち骨の異狀さえ調整すれば總ての病氣が治ると云ふのであつて、スチル氏によつて創始され一八七四年に發表されたものである。オステパシーは最初病氣の原因は骨の異狀にありと定義されてゐたが、現代では其範圍が擴張されて病原は左記の五項に定義さるゝに至つた。

一、骨骼の異狀。

二、筋肉及び腱の異狀。

三、内臓の轉位。
四、神經及び血管の異狀。
五、淋巴液の停滯。

スチル氏はヴアージニヤ州に生れ、成長後内外科醫となつて開業したが、其子供が三人共脊髓膜炎に罹つたので、其當時のあらゆる最善の療法を試みたのであるが如何ともすることが出來ず、遂に三人共死亡してしまつたのである。スチル氏は之れによつて醫學治療法は未だ完全なものでなく、到底深く信賴するに足るものでないと其缺陷を痛感し、大なる發奮の下に專ら人體の基本的研究に着手したのである。多年熱心なる研究の後、遂にオステオパシーの原理を發見し社會に發表したのであつた。併し當時の醫學界は何人も彼の言に耳を傾ける者はなく、何れも皆彼を狂人なりと罵倒嘲笑し、非常なる迫害攻擊さへ加へたのであつた。然しスチル氏は世の毀譽褒貶を意とせず、以前として熱心なる研究を續け、貧

民を救助し幾多の貴重なる經驗を重ね、其奇蹟的効驗は歳月と共に嘖々として、四隣に傳り遂にあらゆる階級の人々が治療を希望するに至り所謂門前市をなす樣になつたのである。斯くしてオステオパシーを發表してから、二十年後の一八九二年に始めて其學校の設立を見るに至つたのであるが、其後斯術は益々發展して殆ど各州の大都市にオステオパシーの專門學校が設立され、今日の盛況を呈する樣になつたのである。

カイロプラクチツク。カイロは希臘語で手と云ふことで、プラクチツクとは技術と云ふことである。即ちカイロプラクチツクとは手を以て椎骨の調整を行ひ、疾病を治療する技術と云ふ意味である。カイロプラクチツクの治病原理としては左の五項が擧げられてゐる。

一、椎骨は不全脱臼することがある。
二、不全脱臼の結果は脊椎孔内を通過せる神經を激衝させることになる。

三、其結果脊髓神經を刺戟し交感神經を障碍する。

四、其結果關係諸器官の機能を全部又は部分的に障碍し遂に病的症狀に陷入らしめる。

五、カイロプラクチツクはこの孔内神經の激衝を除去し、障碍部分を治療して其機能を完全に營ましめる方法である。

と述べてゐるが之が根本的の理論とする處で、即ち脊椎の不全脱臼さへ矯正すれば萬病が治ると云ふのであつて、カイロプラクチツクの脊柱正整法とか脊椎骨調整法等と云はれる所以である。

此治療法の起原は遠く三千年前埃及に於て發見され實施されたものであると云はれてゐる。之が米國に輸入されたのであるが、其當時はいゝ加減な藪醫者連中によつて紹介されたもので、別に理論も何もなく唯だ山師的に宣傳されたものであつた。その爲め到底多くの世人に信用を得ることが出來ず反つて排斥を受ける

樣になつたものである。然るにバーマー氏は該博なる知識を傾倒し、生理學、解剖學上の確固たる根據を發見したので、遂に之を科學として一八九六年即ち今から約三十五年前カイロプラクチツクと命名して堂々と發表したのである。其後多くの人々によりて更に研究が深められ、オステオパシー同樣各州の大都市に其專問學校が設立され、今日の隆盛を來たすに至つたのである。

スポンデイロテラピー。スポンデイロは希臘語で脊髓、テラピーは操作と云ふ字で、脊髓を操作すると一切の病氣が治ると云ふ意味である。即ち吾人の身體各部は勿論重要なる作用を營んでゐる內臟や血管は總て脊髓によりて支配を受けてゐる。其脊髓のある部位を刺戟することにより、心臟、肺臟、胃腸肝臟、腎臟及び其他の內臟器官を擴張させたり、又反對に收縮させたり、或は血管の擴張及び收縮を支配して、充血を除いたり又は血液の不足を補ふたりすることを發見し、此原理の應用により總ての疾患を治療する方法にして、エブラム氏によつて

創始されスポンデロテラピーと命名して一九一〇年に發表されたものである。この療法も現今米國政府公認のもとに盛に普及されつゝある。

扨て之等の理學的療法が米國に於て盛に行はれてゐるからと云つて、其儘日本人に應用して豫期の効果を齎すことは至難である。何とならば日本人と米國人とは體質、習慣、又は趣味、嗜好其他に於て非常な相違があるからである。

第十一節　一元二面論と快泉式指壓療法

身體諸器官の活動を調節するものは神經系統であり、又內外兩界の事情に應じて身體の有意的運動を惹起すのも同じく神經系統の作用である。そこで神經系統は身體の統治を掌るものであるが、茲に於て逢着する一大疑問は、元來精神は腦髓の活動的產物であるか、又は神經系を使役する所の實在であるかといふことである。換言するならば綜合統治の作用は物(神經)の所持する力であらうか、又

は心の所持する力であらうかといふことである。前者は唯物論の主張であり後者は唯心論の主張であるが、實の所此兩主張は古來から對立せる二大主張であつて、其何れが是にして何れが非になるか解決のつかない問題である。恐らく今後何年經つても解らぬことであらう。何故ならば其何れに就くにしても甚しい無理があるからである。依つて近時の學者は此兩說を調和するため、物でもなく心でもない一の實在を假定して物心は此實在の兩面をなすものであると唱へる樣になつた。即ち人間は之を客觀的空間的に見るならば肉體即ち物質であり、主觀的時間的に見るならば精神即ち心である。精神と云ひ肉體と云つても根本的に別個の實在があつて此二つが結合して人間が構成されてゐるのではなく、それは一つの生命の兩面をなしてゐるものである。と云ふので之が即ち一元二面論と稱する學說である。

そこで疾患治療法としては、肉體のみに重きを置く方法も、肉體を度外視して

精神のみを主とする療法も、共に片手落の治療法と云はねばならない事になる。

從來行はれてゐる米國式の指壓療法は、學問的に根據を置くところは大なる特色であるが、人間を餘りに物質と看做し機械化しての療法であるところに缺陷が見出されたのである。

私の治療法は米國式の脊髓及び骨柱療法等は勿論、古今東西兩洋の各指壓による療法の生命を抽き、それに私の體驗や工夫改良を加へ、之等を巧に綜合統一し、又人間は肉體と精神との兩面からなる一の實在であるとの見地から、精神的治療にも留意してなす所の、即ち科學と體驗に基礎を置く所の最も合理的な無藥理學的新療法である。

第二章　指壓療法原理

第一節　疾病治癒の主體

野生の動物は祖先以來自然の生活に慣れて來たから、病氣になると云ふことが極めて尠ない。よし病氣になつたとしても彼等の病氣に對する抵抗力は、人間のそれに比して、比較の出來ない程强大なものであるから、人間の如く服藥するか電氣療法を施すとか又は鍼を打ち灸をすえる等の事をしなくとも、直に病氣は癒つてしまふのである。之は動物の身體中に存する自然良能の然らしめる處で、人間とてもやはり動物の一種である以上、此偉大なる作用を有する自然癒能力の存することは爭はれぬ事實である。二三の例を擧げるならば、

一、皮膚に怪我をし傷が出來た時、之に藥を付けたり又は藥で洗滌したりする

のは、單に傷面から黴菌の侵入するのを防禦するだけであつて、傷面其物は自然癒能の力で次第に治癒して舊態に復するのである。

二、右の場合又は其他の原因で皮膚内に黴菌が侵入した時は、傷面は赤く腫れ上り膿を生ずる。之は血液中の白血球が黴菌を防ぐために集中して、食菌作用を行つた結果であつて、膿は細胞が此處に侵入した黴菌と戰ひ、戰死した殘骸の塊である。

三、不良の食物を攝取した時嘔吐又は下痢を起したりするが、この場合嘔吐や下痢其物は決して病氣ではなく、胃腸内に不良な食物のため有害な醱酵が起つたから、之を體外に排泄しやうとする自然良能の發現である。

四、感冒に罹り咳嗽をする、咳嗽は決して病氣の本體ではなく氣管内の有害な分泌物を排除する自然良能の現れである。

五、腸チブスに冒されると高熱が久しく續き、普通人はこの熱を非常に心配する

が、熱其物は決して病氣ではなく黴菌の造つた毒素に對する身體の防禦反應であつて、病氣を治す爲に起つた自然良能の發現である。

依てこの場合熱があつた爲に病氣が良くなつたのである。

右の例によつても知れる樣に熱や膿だとか咳嗽、嘔吐、下痢などは決して病氣の本體ではなく病氣をすべく起つた身體の爲に最も有利な作用で、即ち自然良能の發現であつて喜ぶべき現象なのである。

斯くの如く凡ての疾病を治癒せしめるの主體は、醫師でもなく其他電氣や鍼灸等の働きでもなく、全く吾人の身體中に存する、自然良能の作用に外ならないので、醫師や藥物は唯だ疾病の進行を阻止するとか、又は自然良能を補助するに過ぎないのである。換言するならば疾病を治癒せしめるの主體の所在は、身體の外でなく身體の内に存すると云ふことである。希臘の大醫聖にして醫道の鼻祖と仰がれてゐるヒポクラテスは『疾病は天が治し御禮は醫者が貰ふ』と云ひ又『醫師

は自然の命令を聞くべき者で、自然命令を與へ得るものでない』と云はれてゐるのはこの眞理を喝破したものに外ならない。

そこで疾病治療上最も肝要な法則は、この自然良能を少しでも損せずに保護し善導してやり更に積極的にはこの作用を一層促進せしめるに努めることであつて、かくすることが最も効果のある根本的の治療法となるのである。斯くの如く人體内には偉大なる靈能があるにも拘らず、世人の多くは疾病を治す力を身體の外に求め様として徒にあせり、この力を働かすことを忘れてゐるのである。

その結果は慢性病となり凡ゆる療法を試みても治らず、天や人を怨み己は一生病氣から脱離することが出來ないなどと悲觀し、終には自暴自棄に陥る様になつたりする。この様な人は吾人の身體中に、病魔に打勝つべき靈能のあることを知らぬ憐むべき人と云はねばならない。けれどかゝる人は宜しく生體は決して微力なものでなく天賦の偉大なる靈能即ち自衛機能のあることを自覺し、この作用を

最も合理的に刺戟し、振興せしめたならば、如何なる難病痼疾と雖も何時かは必ず根治し愉快なる人生の月日を送迎することが出來る様になれる。故に煩悶懊惱するの必要はないのである。元來人間は健康であるべきが自然の狀態で、疾病は不自然の狀態である。不自然の狀態即ち病氣になるにはなるだけの原因があつたからで、其根本の原因を探り之を除去し、最も適當なる方法を講じて、自衛機能を振興せしめたならば、自然の狀態即ち健康を恢復するのは明である。

以上述べたやうに自然良能は疾病治癒の主體であり原動力であり絶對の力である。故に治療上最も重んずべき肝要なものであるから、節を改めて更に說述することにする。

第二節　自然良能に就て

今吾人の身體を解剖すると澤山の器官を見ることが出來る。呼吸の器官もあれ

ば消化の器官もあり又循環の器官もある。次にこれ等の器官例へば肺とか胃とか腦髓とかを取つて之を顯微鏡に照すと、全く無數の細胞若くは細胞の變形物である纖維から成るを認めるであらう。故に人體が生活することの出來るのは、全く之等の器官が全體の生存の爲に必要な活動を分擔してゐるからであり、同樣に又之等の器官が全體の爲に必要な活動を分擔することの出來るのも器官を構成する細胞が其器官全體の爲に、各々それ〴〵必要な働きを爲すからである。故に人體の活動は恰も兵卒が全軍の目的に從づて運動する時の如く、又幾多の職工が一定の模型に從つて各受持の仕事をなす時の如く、規律正整一擧一動悉く法あり度あり實に驚嘆に値する程統一されてゐるのである。

然らば細胞はどうかと云ふに、之も無數の原形質の顆粒が集つて、それ〴〵必要な活動をするからであり、又原形質の顆粒なるものは澤山の分子が集つてそれぞれ活動するからである。

然しそれは獨り細胞に限らず原形質に限らず、宇宙間に有と有ゆる物は皆同一の構造を持つて居り同一の構造にあるものである。小は合して大となり大は合して更に大となり、然も小には小の活動があつて大の活動の一部分を成し、又大には大の活動があつて更に大なる物の活動の一部分をなすものである。それ故宇宙間の物は皆それ自身其物の統治者であると同時に、其一部分として含有する所のものに對し被治者であるの關係にあるので、小にも限りなければ大にも限りなく其階級の數は到底人知の及ばぬ所である。

扨て細胞は生活體の構造及び生理上の一單位であつて、其大きさは一分の五十分の一乃至四五百分の一といふ微小なもので、人間の身體は凡そ四百兆の細胞によつて構成されてゐる。この微小にして夥しい細胞は原形質から成つてゐることは既に述べたが、この原形質の一つ一つが何れも生命のある一個の生物である。無數の原形質はそれ〴〵各自の天職卽ち各獨自の專門的能力を發揮して、一に

は自己の爲め一には細胞――組織――器官――系統――身體全體の生活現象を營む爲に活動してゐるのである。

人體の原形質は一個の生命體であることは只今述べたが、何れも人知の測り知ることの出來ない驚くべき靈能を具有してゐる。人間の身體が生活現象を營む上に於て、有りと有ゆる必要な働きを原形質は分擔してゐる。それ故怪我をすればそれを治すべき原形質もあれば、又黴菌が侵入すればそれを食殺すべき原形質もあり病氣になれば健康を恢復しやうと努力する原形質もある。要するに人間が生きる上に於て必要とする總ての能力を原形質は持つてゐるのである。

斯の如く細胞中に含める原形質は、外界の狀態に適應せんとする機能を有し、一旦病に冒されても其障碍の大きくならないうちに、再び調和を恢復し健全なる狀態に復せしめるの働きがある。此機能を稱して自然良能と云ふのである。此良能の發現によれる生理的作用の重なるものを上げると次の如くである。

一、體溫調節作用。外界の溫度が低下すれば、皮膚の血管は收縮し流れる血液の量を減じて傳導輻射の熱量を少くし、又汗の分泌を少くして溫熱の發生を大にする。之に反して外界の溫度が上昇すれば、皮膚の血管が擴張して流汗をなし呼吸運動が盛となり、呼吸を增し蒸發を高め、又全身の筋肉は緩みて溫熱の發散を大にする。斯の如く外界の事情に適應して常に身體の溫度は、身體組識が如何なる場合にあつても、常に一定の調節を維持される樣に出來てゐる。

二、代償作用。肺、腎臟、睾丸の如く一對をなす器官が疾病の爲め其一方が常態の機能作用を失ひたる時は、他の一方がこれを償ふて兩方の機能作用を兼ね行ひ、支障を生ぜしめない樣になる。

三、保護作用。目に何か物が觸れやうとする時、眼瞼を閉じたり、熱い物や其他の危險物などが手に觸れやうとする時、直に手を引込められたりするのは神經の反射作用で、非常な迅速度で外界に順應して其危險を免れしめるのである。

四、排棄作用。身體に有害なる食物が體内に入つた場合、嘔吐を催したり下痢を起したりするのは、之を體外に排出せんとする自然の順應作用であつて、咳嗽なども其一例である。

五、發達作用。或る機能作用をなす爲に通常狀態とに拘らず、それに適應する樣に其部分が特に發達するもので、力士の筋肉や車夫の腓腸筋等は其好適例である。

六、免疫作用。一度傳染病に罹ると一生中に二度と其傳染病に冒されることは極めて少ない、之は最初傳染病に罹つた時、身體に抗體を生じ免疫性を得たからで、これが一生保存されるためである。

七、共同作用。人體の總ての器官は生命のある限り相互に扶助し合つて、共同生活をなすものである。此の共同作用は人體が外界に順應するに最も必要なもので、神經系の作用によつて行はれるものである。

八、再生作用。身體の一部が破壞され缺損を生じた場合、神經の反射刺戟により其部分の血行は旺盛となり、血液の養力を以て直に元通りになる。

九、防禦作用。チブスや、毒血症に侵された時發熱するのは、其病氣に打勝たうとする爲であつて、即ち之は自然良能の發見で、つまり疾病と自然癒能力との戰鬪である。そこで此種の熱を無闇に低下しやうすることは自然良能の順應を障碍するものである故何等の利益がないのである。

十、內分泌作用。若しも神經系が男主人であると假定したならば內分泌は女主人とも云ふべきではあるまいか、即ち內分泌は循環系中に入つて特種の器官に達し、其機能を或は促進し或は抑制し、神經系と共に全身の調和統一を保つて人體の諸作用を調節するものである。

以上は自然良能作用の一端ではあるが、讀者諸君は之によつて如何に人體が絕妙なる自衞の機能を有するものであるかを窺ひ知ることが出來るであらう。

第三節　疾病の根本的原因

凡て何事でも藪から棒と唐突に起るものではない。結果と云ふものは必ずそれに對する原因があり、それに因つて始めて生じた現象であつて、原因がなくて結果が生れ結果があつて原因の存せぬことはない。病氣とても同じことで病氣にはそれを惹起すだけの何等かの原因があつて、それに因つて發生した產物である。

そこで、疾病の治療上其病氣の原因を知ることが先づ第一に肝腎なことであつてそれも第二第三次的のものでなく、勿論それも大切なことには相違ないが、第一の根本的病原を極めることである。根本的の病原を知りそれを除去するに最も適當の方法を以てするならば、眠れる自然の良能は覺醒し、充分なる靈能を發揮する樣になるから、如何なる病氣と雖も不治と云ふことはないのである。然らば根本的の病原とは何か、普通一般に病氣の原因であると考へられてゐるものは多

くは第二次的のもので、例へば人は普通感冒に罹ると其原因は急に寒冷の空氣に遭遇したからだなどゝ考へる者が多いが、此場合寒冷なる空氣に遭遇した事は第二次的のもので、第一のものは其人に寒冷に對する抵抗力が充分でなかつたと云ふことに起因するのである。即ち皮膚が寒冷に遭遇する時は、先づ血管は收縮して貧血を起し體溫の放散を防ぐが、次に收縮した皮膚や其處に分布せる血管が反應的により強く弛緩し擴張して、血液が體の深部から盛に體の表面に循環する樣になるのであるが、此防禦的反應即ち體溫調節が活潑に營まなかつたからである。もう一例肺結核に就て述べるなら、肺結核は一八八二年にローベルト・コツホ氏の發見した結核菌が肺に寄生して此結核菌の爲に冒されるもので、結核菌が第一の原因であると考へる人が多い。然し此結核菌が入體內に侵入するのは、生後間もなく乳兒の時代に行はれ、學齡兒童に於ては約九〇%は結核菌の傳染を受け、二十歲前後までには其傳染を免がれることが出來ない。滿二十歲以上の人

間で結核菌を體内に持つて居らぬと威張れる者は一人もないのである。故に結核菌が第一原因だとするならば、二十歳以上の世界中の人々は全部肺結核に罹つて居らねばならぬ筈である。然らば何故これに冒される者と冒されぬ者とが出來るか、それは人々の抵抗力の強弱如何にあるので、即ち小兒期に於ては體内にある結核菌は、小兒の旺盛なる生育力に壓倒されて爲に所謂肺病として發病することはない。これが急速に體力を弱くさせる原因、即ち過激に心身を疲勞させたり胃腸を害して榮養不良となつたり、感冒に罹り呼吸道の或る部分に炎症を惹起したり、其他種々なる原因で身體の抵抗力を減少せしめた場合、それに乘じて體内に潜伏せる結核菌が活動して肺結核を惹起すのである。そこで抵抗力さへ強ければ決して肺結核には罹されぬことになる。

右は一二の例に過ぎないが、如何なる病氣でも之に罹ると否とは、結局此抵抗力が強いか弱いかによつて決定せられるのである。元來病氣と云ひ疾病と云ふ

のは、病原物又は病因事項と身體組織の抵抗力との戰鬪の狀態を指して稱するものに外ならないから、たとへ病原物が身體内に侵入するとか或は病因事項に接觸しても、それに對する抵抗力さへ強大であるならば病名を付するに至らざる前に全治してしまふ。一旦病氣に罹つても抵抗力さへ增進強固にするの工夫を講じたならば、疾病は遂に敗北して其姿を消し健康は恢復されることになる。

要するに病氣に罹るのは身體の抵抗力が衰退せるに起因し、之を強大にすることは疾病を未然に防ぎ又は疾患を退治する方法となるのである。然らば抵抗力とは何かと云ふことになるが之は屢々述べた自然良能の作用が、外界の事情に適合せんとして發現した一つの力に外ならないのである。そこで自然良能が活潑に作用するならば、それに附隨して抵抗力も旺盛となることは明瞭である。故に自然良能の作用を障碍するものが、疾病の眞に根本的原因であると云ふ事が出來る。

されば次に來るべき問題は、自然良能の衰退を惹起すべき障碍は何かと云ふこ

とになるが、之には種々ある。大自然が我々に與へてゐる自然界のエネルギー、卽ち換言するならば大自然の產物である日光、空氣、水、食物は其大なるもので次に睡眠運動等は、自然良能を活潑にしたり又は衰退せしめたりする上に於て至大の關係を有する。故に之等の應用法如何は治病保健に多大の影響を及ぼすことは勿論であつて甚だ大切には相違ないが、從來多くの醫學者や斯道の識者によつて屢々說かれて來たことであるから私は省略することゝして、其他の最も肝腎な重なる障碍に就て述べることにする。

一、骨骼殊に脊椎骨の異狀。
一、神經機能の障碍。
一、筋肉の異狀緊縮。
一、血液の循環不良。
一、臟器の無力及び轉位。

一、精神の薄弱。

以上のものは自然良能の衰退を惹起すべき大なる障碍となるものである。指壓療法は强弱緩急自在靈妙なる調節力を有する指壓の技術によつて、之等の障碍を除去し、而して自然良能を保護善導促進して、其必然の結果として抵抗力も亦强固とならしめることゝなるによつて、疾病を根治するの治療法である。

第三章　指壓治療法手技

指壓治療法は屢々述べた如く專ら指壓を使用して、病弱なる身體を健康なる身體に改造する所の技術であつて、其治療法手技としては種々なる方法があるが之を主要手技と補助手技との二つに大別することが出來る。主要手技としては指壓法、强壓法、掌壓法の三法であり、補助手技としては强摩法、敲打法、微振法等である。

第一節　指壓法

形式。指壓法は指先の指紋部先端に精神を集中して押壓するの方法で、使用する指は左の如くである。

イ、拇指（他の四指は握り又は伸す）。
ロ、示指（右と同樣他の四指は握り又は伸す）。
ハ、中指（右と同樣）。
ニ、示指、中指（二指を並列し他の指は握り又は伸す）。
ホ、拇指、示指（二指を間隔を置いて並列し通常他の指は伸す）。
ヘ、示指、中指、藥指（三指を並列し他の指は伸す）。

程度。指頭にて押壓する力の程度は、被押者即ち患者の病氣の輕重狀態は勿論老若男女年齡、體質等を斟酌して、加減すべきであるが、大體に於て患者が將に痛みを覺え樣とする所、又は一寸痛み（快痛）を感ずる位の程度が適度である。

時間と回數。指壓法を施す一回の時間は、脊椎部に於て五秒間、其他の部分に於て三秒間を適度とし、一ヶ所二三回宛又は數回行ふものとする。

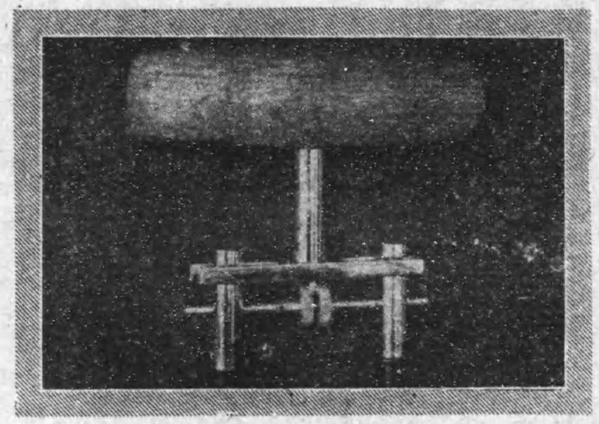
適應部位。指壓法を施す部位は、脊椎部、病患部、其他全身である。

備考。指壓法は最も多く使用する手技で之を施すことを「指壓する」と云ふ場合が多い。又この法は前述の如く何れの指も使用するが、最も多く使用するのは拇指と中指を中心とする三指卽ち示指、中指、藥指である。而して拇指を用ふべきか三指を用ふべきか又は其他の指を用ふべきかは、患者の身體の指壓する各部位によつて相異するものであるが、要するに指壓法を施すべき部位により、其目的を考へそれに從ひ、最も行ひ易き指を都合の良い數だけ使用するのである。

目的。本法は主として椎骨の異狀矯正や、中樞神經や末梢神經に對し刺戟や抑制を與へたり筋肉の異狀緊縮を整復したり、又全身及び身體各部の血液循環や、直接內臟器管部に施して其等の作用を促進せしめる爲に施すものである。

第二節　壓迫法

形式。この法は通常兩手の拇指の爪面を向ひ合せ、各他の四指は握りて、其



壓迫器

兩拇指頭にて押壓する方法である。

程度。被押者卽ち患者が、耐得る所迄の壓力で押壓する。

時間と回數。時間は指壓法よりも長く一回通常三十秒間、同一壓力を維持して押續けるのである。回數は一ヶ所一回。

適應部位。脊椎兩側部。

備考。强壓法は拇指頭を使用するの外、强壓の目的を完全に達する爲特に創案せる器具を使用する。該器具は壓迫器と稱し、金屬製の二本の

圓柱があり圓柱の先端には、強壓の効果を徹低させるに遺憾なからしめる爲に、最も合理的な角度に製せるエボナイトが附着してゐる。各圓柱間は中央の車を廻轉することによつて伸縮自在になり、以て脊椎兩側部の強壓に適合せしめ、柄部は木製にてT字形をなし把握して適當の壓を加えるに便に出來てゐる。此迫壓器は亦著しく肥滿した人或は患者の體質により、非常に強力を要するものがある。かうした人に施す場合や術者が婦人の場合、強ち婦人でなくとも力量の經濟をはかるなどにも

壓迫器にて頸椎兩側を強壓せる圖

誠に重寶な器具である。

目的。本法は內臟や血管の收縮又は擴張、迷走神經機能の亢進又は弱減、其他の脊髓反射現象を喚起する爲や、特に脊髓神經中樞に刺戟や抑制を與へたりする爲に行ふの手技である。

第三節　押壓法

形式。通常兩手の各指間を密着し、右掌を下に向け、其上に左掌を相重ねて押壓するの方法である。尙此外に左掌にて右前膊骨の下端を握り、右手掌の腕骨部にて押壓するの方法がある。

程度。勿論患者の病狀や老若男女體質等に應じ、壓力を加減して行ふのであるが、之は施すべき部位や目的により、或は急激に或は徐々に次第に壓力を加へて、又或は一定時間同一壓力を維持して押壓するのである。

時間と回數。時間は急激に行ふ場合は約半秒間位であるが、徐々に行ふ時は約三秒間、同一壓力を維持して長く行ふ場合は一分間位であつて、回數一ヶ所一回乃至二回である。

備考。通常單に指壓法を施すと云ふ場合には、徐々次第に力を加へて約三秒間行ふものを指して云ふ。

適應部位。脊椎部、背部、胸部、腹部等。

目的。本法は主として脊椎骨の異狀矯正や、腹部等に施して内臓器管に刺戟を與へ、機能を促進させるためなどに施すの手技である。

第四節　摩擦法

形式。強摩法は手掌にて強く迅速に摩擦する方法である。形式には大體三種あり、一は兩手の各指間を密着して、手掌を患部に輕く觸れ、兩手を共に急激に左

右に開閉する樣にして摩擦する法、一は兩手掌を平行に並べて、其手掌を上下に移動させて摩擦する法、他の一法は片手にて右の場合同樣指間を密着させ、患部を摩擦する方法である。何れにしても強摩法は強く迅速に摩擦することを要する。

回數。一ヶ所約三十回。

適應部位。胸部、腹部、背部、其他。

目的。本法は皮下血液の循環を旺盛にし、新陳代謝の順程を良好にし、組織の異狀を整復するために行ふの手技である。

第五節　敲打法

形式。右手の拇指を内に入れて他の各其四指を握り、又は各指を伸し其指間を密着させ小指丘の外側にて、敲打する方法である。

程度。強からず弱からず患者の體質や感覺に應じ適度の力を以て迅速に行ふ。
時間。一ケ所約三分間。
適應部位。脊椎部（棘狀突起）。
目的。本法は脊髓反射現象を喚起したり、或は脊髓神經中樞に刺戟や抑制を與へたりするために行ふの手技である。

第六節　微振法

形式。指壓法や掌壓法を行ふ時、手掌に精神を集中してゐると、內部細胞組織の靈動により靈妙快美な微動を起すもので、此の微動を起した手掌を患部に觸れることを微振法と云ふのである。
回數と時間。一ケ所一回、時間の長短は隨意である。
適應部位。頭部、頸椎部、其他各患部。

目的。本法は患者に快感を與へ、神經を慰撫し、神經機能を調節する爲に施すの手技である。

何れが正か否か

西洋醫學は病因を外的に求め指壓法は之を內的に求める。
西洋醫學は人體の有する癒能力を無視して他動的に治さんとし、指壓法は自然に備る抵抗力、癒能力を振作し活動せしむ。
指壓法は健康を喚起せんとするに反し、西洋醫學は健康を作り出さんとする。
西洋醫學は外的の刺戟を避げて生を惱らんとし指壓法は抵抗力を振作して生を全うせんとする。
西洋醫學は病名を主とし、之を名附けんとして診斷し、之によつて治療を行ふ。
指壓法は病勢に重きを置き、病氣の系統症狀性質に據て治療す。

第四章　全身一般指壓法及檢査

全身一般指壓法は前章に於て述べたる各種の治療法手技を應用し秘圖朱點に依つて、身體の各部に治療指壓をする方法である。

第一節　腹部

腹部は通常力を入れると堅く、力を抜くとゴム毬の如く柔軟になり彈力のあるのが健康體であつて、若しも腹部に塊のあるのや押して疼痛のあるのは病患部と見てよい。卽ち鳩尾から左側に亘つて堅いのは普通胃が惡く、又胃部に凝固があつて三週間以上も治療して解けないのは、胃癌の疑がある。右肋骨部の下部の堅いのは肝臟に異狀があり、腹壁が過度に緊張して少しも餘裕のないのは病的であつて、頭部に疾患のある者に多く見受けるものである。反對に腹部を腰とが

腹部指壓法

くつゝいて一枚板の樣になつてゐる樣なのは、胃腸の衰弱してゐることを示すものである。尙又腹部が衰弱して著しく腹力の消失せるものに對しては、腹部以外の全身操作法を施し、直接腹部に觸れる事を避け、單に呼吸により腹部に力を集中せしめ次第に腹力を養ふ樣にする。便及び瓦斯の停滯してゐる場合は、盲腸部及びS字狀部を特に指壓する。又腸結核や患者が婦人で姙娠又は月經時の場合は極て靜に輕く指壓する。

第二節　胸部

肺臓、肋膜、心臓等に疾患のある場合は、上胸部のみでなく、左右の全肋間隙に細かく叮寧に十數回指壓法を施し、次に指腹にて押壓する。喉頭氣管等に異狀のあるものは、片手にて、拇指と他の四指とに分けて其部分の兩側を片側づゝ數回指壓法を施し、次に其兩側の皮膚、筋肉、血管を引張る樣にして、一ケ所を數回上下しつゝ迅速に指壓する。

胸部指壓法

肋骨間の堅いのは肋膜、肺等に疾患があるもので、又肺結核患者の肋間は殆ど其間隙が不平均なものである胃下垂患者の肋骨は大低下垂してゐるものが多い。

鎖骨周圍の異狀と疾患とは深い關係があるもので、鎖骨上下窩が著しく陷沒してゐるものは胸部に疾患のある徵候で、殊に肺結核の疑ひがあるものである。鎖骨上下窩に指頭を差入れることが出來ない迄に氣管に接觸してゐるものは、氣管支加答兒又は喘息の素因となり、又同上窩の廣さが同一でないものがあるが、此樣なものは靜脈の血行が阻害される爲め、常に肩の凝の惡い癖が抜けないものである。

前頭部指壓法

第三節　頭部及顏面

頭部の治療に當つて、脈搏の搏動が甚だしく、又脈管が膨れて外部から搏動がわかる樣なのは相當充血してゐる場合で、中年以上は多く動脈が硬化してゐる。前頭部を指壓して、ぶよ〳〵する感じのあるのは、頭部の血液循環が惡く汚血が停滯してゐるのであるから、其部位を解くと同時に、前頭部、後頭部の指壓を充分行つて、血液の循環を良好

顏面部指壓法

にすることが必要である。

尙又頭部の指壓は兩手の拇指頭又は兩手の示指頭にて左右同時に指壓する。

顏面部は兩手の示指頭にて左右同時に指壓する。

第四節　後部頭及頸部肩部肩胛部

後頭部及肩部は祕圖の朱點を相當强力な指頭法を施し、後頭最上部の中央で後頭骨の境、卽ち頂窩部を拇指頭にて上方に押上げる樣に指頭

法を行ふ。

頸椎は常に頭部を支持して、全脊椎中最も屈曲性の多い部分である爲に、索引捻轉することがある。之が寒冷其他の原因により筋肉の收縮、椎骨の異狀を來し、其影響が眼、耳、鼻、口、腦及び咽頭等に及んで疾病を惹起す樣になる。又頸神經は單獨に作用するものでなく、一個の神經叢を形づくり、之から周圍に向つて其支枝を出してゐる。又神經叢と交感神經や迷走神經等との間に交通枝を有してゐる爲め、其神

頸椎部指壓法

經分布のどの部位とも相關聯して影響する。それであるから頸椎の兩側は特に叮寧に指壓する必要がある。

肩胛骨部指壓法

頭部肩胛部に指壓法を試みて堅いのは、血液の循環が不良である證據で、斯の樣な人は頭痛、逆上、不眠症肩の凝等を起し、腦の病氣を招く、又胃腸も不消化勝である。

第五節　背椎部

患者をして身體中何處にも力を入れさせずに、最も自然に直立せしめる。此時若し左右の肩の高さが不平均で何れか一方が低い時は、其低い方の側に脊柱は彎曲してゐるものと見なければならない。尚脊柱の左右の彎曲は多く骨盤及びそれ以下の異狀から來ることが多い。

患者の身體を眞直ぐにして正しく伏臥せしめる。然る後右手の示指を

脊椎檢査の圖

伸し他の四指を握り其指頭にて、脊椎棘狀突起の眞上を上方から順次に觸壓して下る。次に兩手の示指頭（他の各四指は握る）にて脊椎の直ぐ兩側を右同樣に上方から觸壓して下る

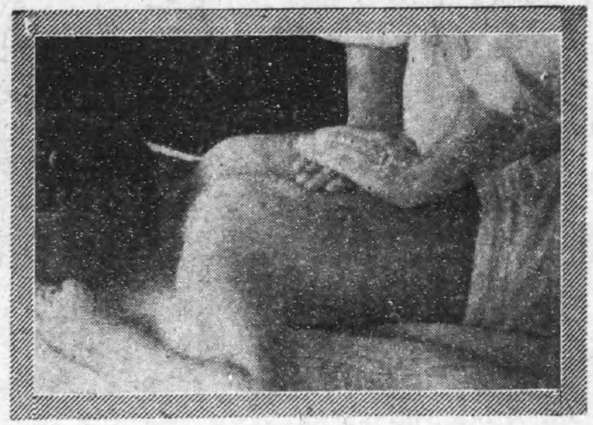
斯法は棘狀突起と棘狀突起との間隙や之が直線的になつてゐるか、即ち椎骨が前後左右其他の方向に歪みがないか否かを知るの法である。尚椎骨の充分外部に顯れないものには、患者を正座させ上體を前法に屈げさせると各棘狀突起は隆起して、容易に異狀を發見することが出來る。

脊椎檢査の圖

脊椎部指壓法

患者を正しく座らせ上體を前方に屈げさせて、術者は脊柱兩側の溝に示指及び中指の指紋部を當て、稍々加壓しながら徐々に下方にやる時には、双方の溝の深さが同一でないものがある。之は一側の椎骨が前方に廻轉するときは、他側は自ら後方に廻轉する故に、脊椎兩側の溝の深さに變化が出來るのである。

患者を正しく座らせると、側面の腰線切込みが一側だけ特に深いものがある。



脊椎部に押壓を行ふ法

之は脊柱の彎曲によるもので、左右不均等な體重を支へ様とする影響は骨盤の上に及んで、遂に骨盤が傾斜して骨盤腔に異狀を生じ、種々の疾病の原因となるのである。

兩手の拇指頭にて脊椎の兩側及びそれより約一寸程離れた左右の部位（薦骨脊柱筋の上）を、上方から順次に指壓して下る。

斯法は脊椎周圍の組織の何れかに知覺過敏の所があるか否かを知るの法で、知覺過敏の所は多く壓痛卽ち

上肢指壓法

壓すと特殊の痛みを有するものである。又それによつて其部位の側の椎骨の異狀を發見することが出來る。

第六節　上肢

上肢に疾患のある者には、其局部に細かく（大體の要所は祕圖朱點の部位十數回充分に指壓を施す。

上肢の神經痛、リウマチス、又逆上不眠症。等に適應す。

下肢指壓法

第七節　下肢

臀部又は下肢に疾患又は異狀のある者には、其局部を細かく（大體の要所は祕圖朱點部位）叮嚀に充分指壓法を施す。

下肢の神經痛、リウマチス、坐骨神經痛、脚氣、又不眠症、逆上、神經衰弱、關接炎、骨膜炎、感冒等適應す。

附　背椎單位診斷法

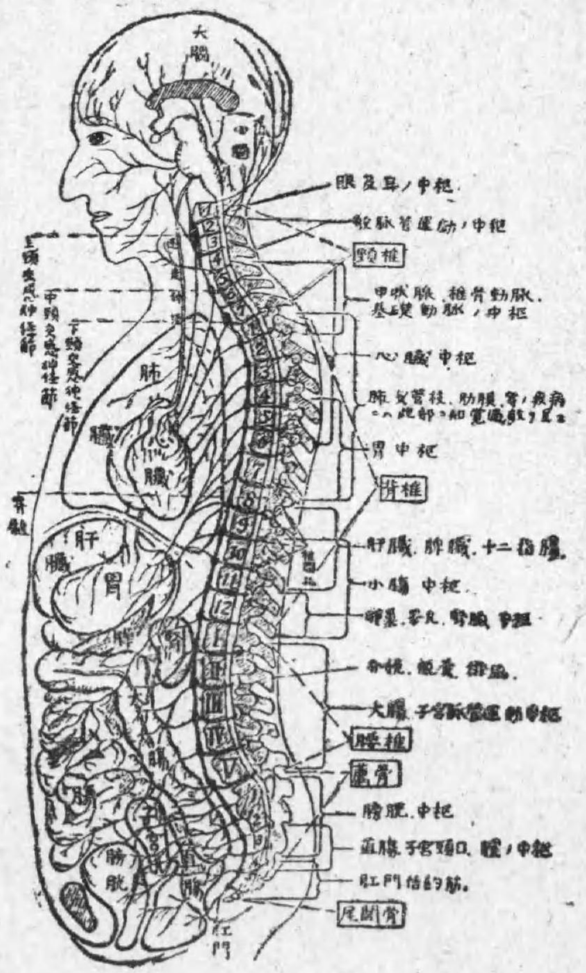
第五節背椎部の所で述べた檢査法により異狀のある椎骨や壓痛點のある部位を知るならば、其部位によつて背髓神經や交感神經の連絡により、何れの器官に異狀があるかを推知することが出來る。此主要點は左の通りである（但しオステオパシーの背椎中樞神經分布圖を參照されたし）

第一頸椎、眼、耳、鼻、腦、顏面。
第二頸椎、顏面。
第三頸椎、橫隔膜。
第四頸椎、眼、耳、鼻、腦、顏面、橫隔膜。
第五頸椎、橫隔膜、扁桃腺。
第六頸椎、扁桃腺。

第七頸椎、扁桃腺、腕、氣管、咽頭。
第一背椎、腕、氣管、咽頭、心臟。
第二背椎、腕、氣管、心臟。
第三背椎、肺臟、心臟。
第四背椎、肝臟、肺臟、心臟。
第五背椎、胃、眼。
第六背椎、胃、脾臟、橫隔膜。
第七背椎、肝臟、橫隔膜。
第八背椎、肝臟、橫隔膜、副腎、膵臟。
第九背椎、脾臟、副腎、膵臟。
第十背椎、腎臟、小腸、眼。
第十一背椎、腎臟、小腸。

第十二背椎。小腸、大腸、腎臓。
第一腰椎。膀胱、大腸、眼。
第二腰椎。生殖器、膀胱、虫様突起。
第三腰椎。生殖器。
第四腰椎。生殖器、肛門。
第五腰椎。肛門。
第一薦椎。膀胱。
第二薦椎。膀胱。
第三薦椎。膀胱、陰茎、膣。
第四薦椎。肛門、陰茎、膣。
第五薦椎。肛門。

オステオパシーの背椎中樞神經分布圖



第五章　精神力應用法

先きの第二章の各節に於いては主として、自己の精神が自己の肉體を左右することに就て述べたが、精神の作用を治病保健に應用する場合之を二種に區別することが出來る。卽ち自己の精神で自己の肉體を左右する法と、第一者の精神力で第二者の心身を左右する法とある。前者は自力精神治療法と云ひ、後者は他力精神治療法と云ふ。

第一節　自力精神治療法

自力精神治療法は『精神は肉體を支配し、肉體は精神を支配する』と云ふ心身相關の理により自己の精神作用を利用して、疾病を治療し又は健康を增進するの

法である。此法には種々なる方法があるが、左の三形式に大別出來ると思ふ。

一、第一形式

自己自身で自己の願望に從つて定めた所の公案を、例へば『己の病氣は必ず全快する』とか『己の病氣は大變よくなつた』とか『或は己は非常に壯健になつた』とか云ふ事項を定めて常に之を思ふのである。

二、第二形式

早朝又は夜間など比較的靜な時、或は其他適當な時を選んで、瞑目し、腹式呼吸、靜座法又は座禪などをして、雜念妄想を排除し、一の定めた公案にのみ精神を集中するのである。

三、第三形式

術者の言語、暗示、態度、身振等により、患者に『此先生ならば自己の病氣は必ず治るであらう、治してもらへる』と云ふ强い觀念を惹起こさせるのである。

指壓療法は元來第一者が第二者の病氣を治療する方法であるから、右の中應用すれば第三形式のみであるが、自己が病氣に罹つた場合は第一形式又は第二形式を實行することは勿論よいことである。

第二節　他力精神治療法

他力精神治療法は、術者の精神力を患者に感通せしめて、其心身を強固にし、疾病を治療するの方法である。

一、讀數法

術者の精神を他に感通せんとするには、先づ精神力を發動させねばならない。精神力を發動せしめるには精神の集中をなすことが根本である。精神の集中法として最も簡便なる方法は讀數法である。即ち數を默讀することである。讀數法が精神の集中法として效果のあることは、古來から如何なる名僧知識や其他の大家

が座禪の妙境に入らんとする時、最初に必ず數息法と云つて己の呼吸を數へることを行つたのによつても之を知ることが出來る。

そこで指壓療法に於ては、指壓法や强壓法をなす時併せて讀數法を行ふ。指壓法に於て五秒間をなす場合は、一二三四五六七八九十と一から十迄の數を默讀する。三秒の場合は之を稍々早口になす强壓法に於ては一から六十迄の數を默讀するのである。

讀數法は唯に精神の集中法として效果があるばかりでなく、附隨的に指壓法をなす一回の時間の測定法となるの利益を有するものである。

注意。若し身體各部の指壓に讀數法を應用することは煩雜であるとしたならば、背椎部の操作法の場合だけには必ず行ふことにするとよい。

二、觀念法

疾病の治療に臨んでは大體に於て病氣を治療すると云ふ觀念を持することは勿

論であるが、奏效を確實迅速ならしめるために、特に强烈なる觀念を患部に集注することを觀念法と云ふ。此際術者の精神力は其の目的部位に指頭を傳りて强く集中され、患者の身心に大なる衝動を與へるものである。然し何人と雖も長時間も觀念の集中には堪えられないから一二分間の瞬間でよいので、術者の修養が熟達し、精神が統一され、患者の精神も之に應じてゐる時は、奇積的の效驗を顯すことがある。尙ほ觀念法を行ふ時患部を强く凝視してゐることは此觀念法を一層有效ならしめるものである。

右の外效果の多い他力精神治療法があるが一般的でないから他日の機會に讓つて割愛することにする。

本療法は勿論各種の指壓法のみで充分なる效果を擧ることが出來るが、精神的方面にも留意して指壓するならば、更に一層其治療を有效ならしめることが出來るであらう。

第六章　指壓適應症

第一節　適應症

○消化器病＝胃癌、胃潰瘍、胃加答兒、胃弱、胃酸過多症、胃酸缺乏症、胃擴張、胃下垂、胃痛、胃痙攣、消化不良、腸加答兒、常習便祕、下痢、盲腸炎、肝臟充血、肝臟硬化、黃疸。

○呼吸器病＝肺結核、肺炎、肋膜炎、喘息。

○循環器病＝動脈硬化症、血壓亢進症、心臟內膜炎、心囊炎、心悸亢進症。

○泌尿器病＝腎臟病、膀胱加答兒、遺尿症（寢小便）。

○生殖器病＝陰萎、遺精、夢精、早漏、勃起衰弱、快感減少、性慾缺乏症。

○婦人科病＝子宮癌、子宮内膜炎、子宮實質炎、卵巣炎、白帶下、月經不順、月經痛、不感症、乳汁分泌減少。

○神經系病＝腦諸病、神經衰弱、不眠症、ヒステリー、各種神經痛、脊髓病、中風、半身不隨。

○其　他＝脚氣、糖尿病、痔疾、肩の凝、脊椎カリエス、リウマチス。

第二節　難病がどの位の日數で全治するか？

本指壓療法は適應症に擧げたる疾病に對しては、何れも的確顯著偉大なる效果を奏することが出來る。然らば各種の病氣がどの位の日數で全治させることが出來るであらうか、勿論之は疾病の種類や狀態、各人の體質、環境、年齢、性別、職業等によつて相違するものであるから、嚴密に數字を以て劃一的に示す譯にはゆかないが、臨床的實際の經驗よりの統計によれば、大體に於て發病後より現在

迄の日數に比して凡そその一割位の日數で全治なすものである。御參考迄に次に主要なる疾病の個々の全治日數表を記載致しますから、之を御覽になれば詳しいことが御分りになると思ふ。然し御斷りし置きますが、醫藥其他あらゆる療法を試みても一向效なき難病痼疾でも、本療法を焦慮らず難病なればそれだけ氣永に努力實行するならば、前記の全治日數を短縮して、より早く全治の喜びを得られるものと、確信して差し障へないのである。

全治日數表

病名	全治迄の日數
慢性胃腸病	一週間乃至一ヶ月
胃痙攣	一回乃至三回
胃アトニー	一週間乃至三週間

胃酸過多症　一週間乃至四週間
胃擴張　一週間乃至一ケ月
胃潰瘍　三週間乃至六週間
便秘　二回乃至一週間
盲腸炎　三回乃至二週間
肝臟病　一週間乃至一ケ月
肺結核　一ケ月乃至六ケ月
肺炎　四日乃至十日
肋膜炎　一週間乃至一ケ月
喘息　三日乃至二週間
動脈硬化症　一週間乃至一ケ月
心臟病　一週間乃至一ケ月

腎臟病　二週間乃至一ケ月
膀胱加答兒　一週間乃至一ケ月
寢小便　三回乃至十回
陰萎　一週間乃至五週間
早漏　一週間乃至三週間
子宮病　一週間乃至一ケ月
月經不順　二日乃至五日
白帶下　一週間乃至一ケ月
乳不足　二日乃至十日
不感症　一週間乃至一ケ月
神經衰弱　一週間乃至一ケ月
不眠症　二回乃至二週間

ヒステリー　一週間乃至四週間
座骨神經痛　二　同乃至三週間
頸膊神經痛　二　同乃至一週間
中風　二週間乃至三ケ月
脊髓病　二週間乃至三ケ月
肩の凝　一　同乃至三　同
脚氣　七　日乃至一ケ月
痔疾　三　同乃至三週間
糖尿病　二週間乃至二ケ月
腰の痛　一　同乃至三　同

第七章　秘圖說明

第一節　秘圖の見方と注意

（1）治療圖解のイロは頸椎の兩側部、ハニホヘは胸椎の兩側部、トチは腰椎の兩側側、リヌは薦骨孔部で、以上の朱點は何れも神經の中樞部卽ち自律神經（內臟神經）と連絡して肺、心臟、胃、腸、肝臟、其の他總ての器官の機能を主宰してゐる神經の源である。此の部位に指壓刺戟を與へると、器官の作用が衰弱して居る時は神經の機能を旺盛ならしめて恢復させ、反對に器官の作用が過度に亢進してゐる時は神經の機能を抑制して其の作用を正狀ならしめることが出來る。卽ち神經の中樞部に指壓の刺戟を與へるならば、神經の機能は整調され其の神經の分布を受ける末梢器官の作用を完全にさせることが出來るのである。從つて此の

治療點は治病上の奥義である。又病患部に指壓押壓刺戟を與へると患部に分布せる末梢神經の機能は整調され、血液の循環は旺盛となり組織は充分なる榮養物や酸素の供給を受け、老廢物は完全に持ち運ばれ、其の上に白血球が增加されるから黴菌は殺滅され、毒素は無害ならしめられて、組織の機能は完全に復活し中樞神經機能の整調と相俟つて病氣は自然に速かに且つ根本的に全治するに至るのである。

（2）治療圖解のイからル迄は朱點の部位のみを指壓すれば宜いのであるが、其の他の部位卽ち病患部は朱點の所を中心としてその上下或は左右を細かに指壓するのである。尙ほ指壓するに際し若し疼痛のある場所或は特に心持良い痛み卽ち快痛を覺える場所があつたら、其處を充分指壓することは治病上非常に有效である。尙又患部に疼痛のある場合は始め極く輕く靜かに指壓し、次第に少しづゝ力を加へて指壓する樣にすると必ず疼痛が直に減退し、回數を重ねるに從ひ全く

除かれてしまふ。

（3）治病を受ける病者の姿勢は指壓する身體の場所に應じて、伏臥位置にさせるとか、仰臥位置にさせるとか又は座位置にさせるとか云ふ樣に、治療をなし易い姿勢を取らして行ふのが便利である。

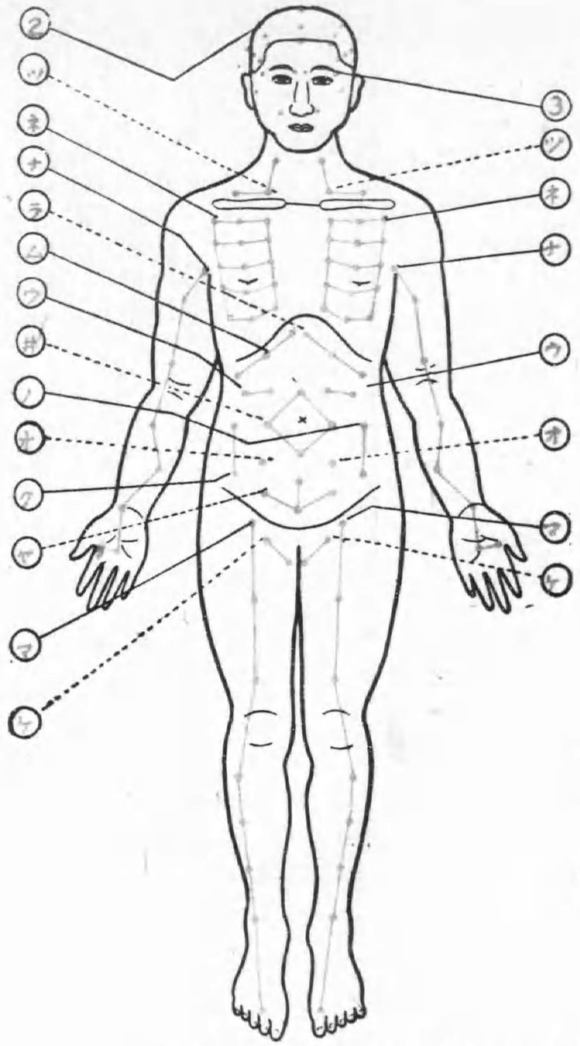
（4）性能力の減退した者は男女の關係する前々に、指壓で『性能增進若返法』を行ふと、其の機能を增進させる事が出來る。然し關係直前でなく毎日一回絕えず行ふと性能力は根本的に增强して若返り朗かになる事が出來るのである。

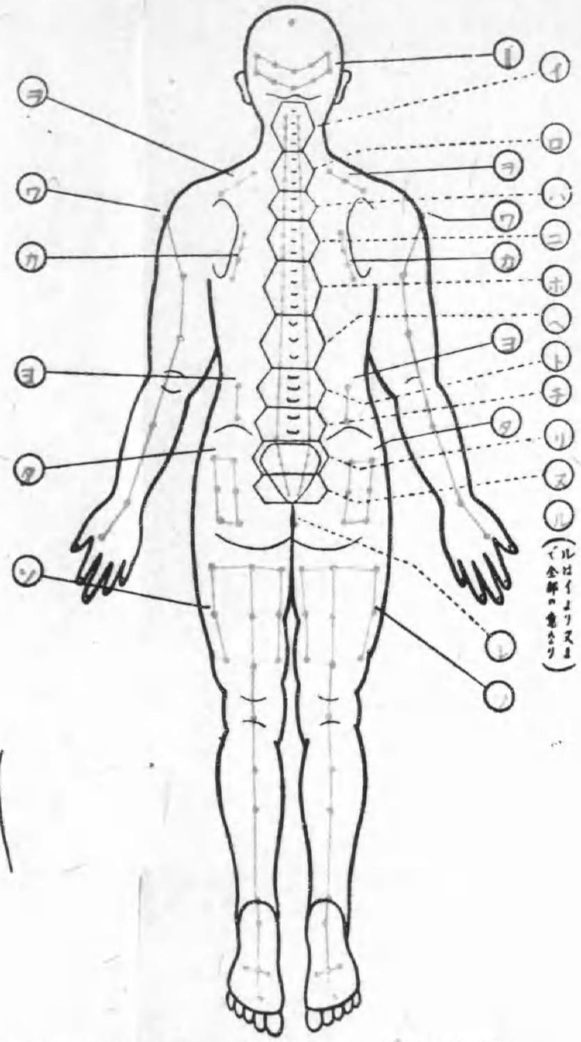
（5）健康が多少害はれて身體の調子が少し變だと云ふ場合卽ち病氣といふ程度迄にならない時、例へば食過ぎて胃の具合が多少惡い時などゝ云ふ樣な時に、指壓で治療すると直に治つてしまふ。

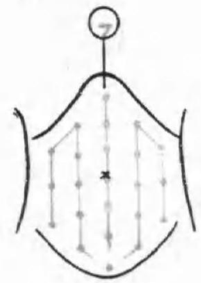
（6）第六章第二節に一述べたる如く病氣の全快期間は勿論病者の體質年齡や病氣の種類輕重及び環境其の他等で一樣には行かない。然し輕症は直に全治して

しまふから問題ではないが、難症でも一二回で奇蹟的の効果を現はしたり、一二週間で全治した實例も多いのであるから。本指壓を信頼して治療を繼續するならば、他の多くの治療法をなすに比して比較にならぬ程的確且つ短期間に全治するに至ることが保證出來るのである。それ故難病であればある程病者は中途で治療を中止せず、根氣よく氣永に治療して全快の喜びを得られんことを切望する次第である。尙萬一病氣全快後再發の場合は、二三日と捨て置かず直に治療すれば數回で全治できる。

指壓治療朱點秘圖







指壓治療譜

神經衰弱　イ・ホ・ト・フ
不眠症　ル・フ
腦の病　1・2・イ・ロ
ヒステリー　イ・ホ・ト・フ
顏面部の病　3
中風　ル（特にイロ）ソ・マ（又はワナ）
肩の凝　イ・ロ・ハ・ニ・ヲ・カ
背髓病　ル
座骨神經痛　ト・チ・リ・タ・ソ
肋間神經痛　ロ・ハ・ニ　ホ・ネ
經膊神經痛　ロ・ハ・カ・ワ・ナ
胃の病　イ・ホ・ト・ラ
腸の病　ヘ・ト・チ・ノ・ヤ・ク
肝臟病　ホ・ト・ム
膽囊の病　ホ・ム
便秘　ヘ・ト・チ　ウ・ノ・ヤ
下痢　ト・フ
胃痙攣　ヘ
盲腸炎　ホ・ヘ・ト・ク
腹の病一般　フ「フは一般萬病に應用して特效あり」
喘息　イ・ロ・ハ・ニ・ヘ・ツ
肺災　イ・ロ・ハ・ニ・ホ・ヘ　ネ（輕く行ふ）
肋膜炎　ハ・ニ・ホ・ヘ・ネ
肺結核　イ・ロ・ハ・ニ・ヘ・ネ

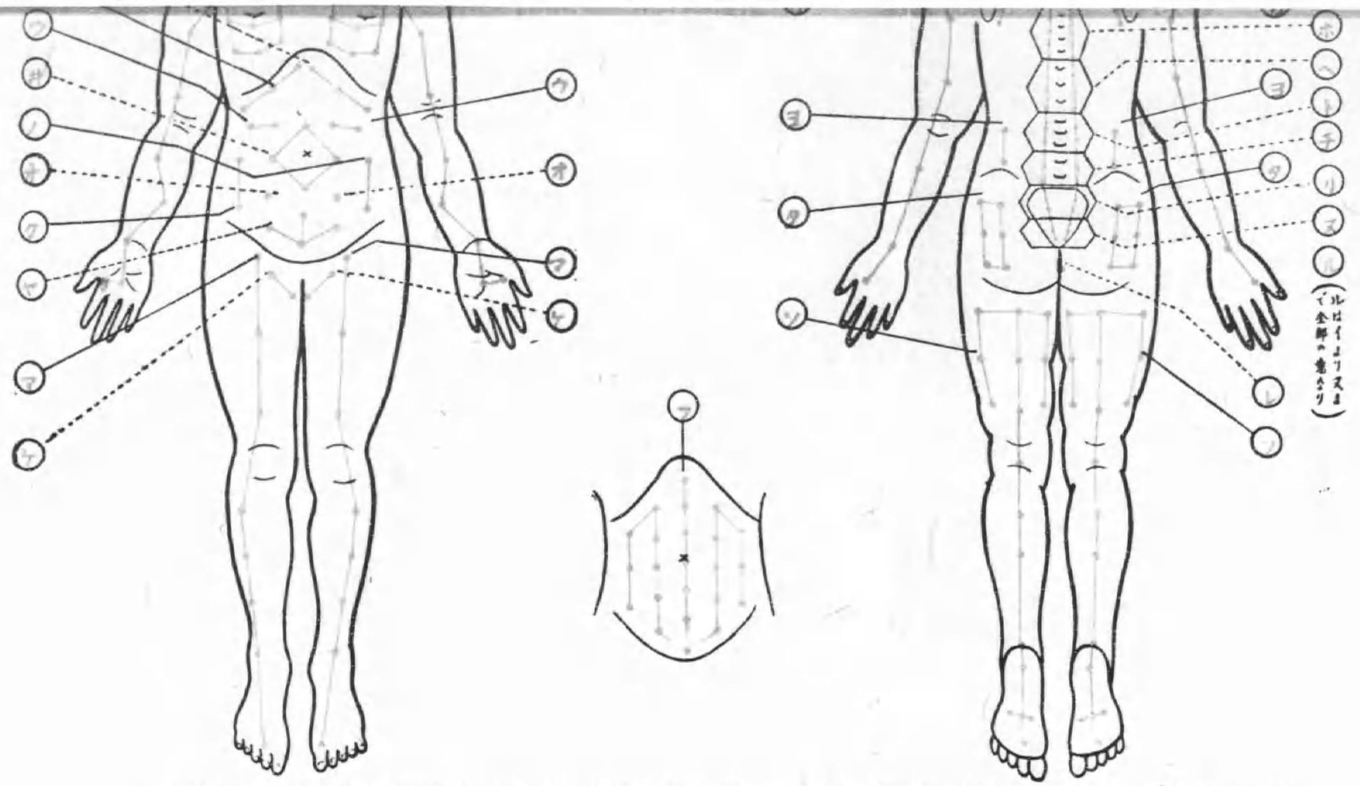
心臟病　イ・ハ「ネハ其中特ニ・ネに心臟部」
動脈硬化症　ル「特にイハニ」
血壓亢進症　ハ・ニ
腎臟病　イ・ヘ・ヨ「但しチは右の二點ク・チ」
膀胱炎　イ・ヘ・ト・チ・リ・ヤ
寢小便　ベ・ト・リ・ヤ
子宮病　ベ・ト・チ・リ・ヤ・ク
卵巢炎　ベ・ト・オ・ヤ・ケ
不感症　ベ・ト「特にチ・リ・トチ」フ・ヤ
月經困難　ヘ・ト・チ・リ
乳不足　ル（特にニ）ネ「乳腺周圍」
遺精夢精　ヘ・ト・チ・リ・フ・ヤ
陰萎早漏　ヘ・ト・チ・リ・フ・ヤ
脚氣　ヘ・ト・チ・ダ・レ・マ
糖尿病　ロ・ヘ・ヌ・フ・ラ・ム
惡寒　ホ
手の病一切　ロ・ハ・カ・ワ・ナ
足の病一切　ト・チ・ソ・マ
背椎カリエス　ル（特に患部）
痔の病　ト・チ・リ・ヌ　ネ・ノ・ヤ・ク
腰の痛　ト・チ・ヨ

―附―

無病長壽健康法　ル「特にイロトチ」
性能增進若返法　ヘ・ト「特にチリ」

しさふから問題ではないが、難症でも一二回で奇蹟的の効果を現はしたり、一二週間で全治した實例も多いのであるから。本指壓を信頼して治療を繼續するならば、他の多くの治療法をなすに比して比較にならぬ程的確且つ短期間に全治するに至ることが保證出來るのである。それ故難病であればある程病者は中途で治療を中止せず、根氣よく氣永に治療して全快の喜びを得られんことを切望する次第である。尙萬一病氣全快後再發の場合は、一三日と捨て置かず直に治療すれば數回で全治できる。

療朱點秘圖



指壓治療譜

神經衰弱　イ・ホ・ト・フ
不眠症　ル・フ
腦の病　1・2・イ・ロ
ヒステリー　イ・ホ・ト・フ
顔面部の病　3
中風　ル（特にイロ）ソ・マ（又はワナ）
肩の凝　イ・ロ・ハ・ニ・ヲ・カ
背髓病　ル
座骨神經痛　ト・チ・リ・タ・ソ
肋間神經痛　ロ・ハ・ニ・ホ・ネ
經膊神經痛　ロ・ハ・カ・ワ・ナ
胃の病　イ・ホ・ト・ラ
腸の病　ヘ・ト・キ・ノ・ヤ・ク
肝臟病　ホ・ト・ム
膽嚢の病　ホ・ム
便秘　ヘ・ト・キ・ウ・ノ・ヤ
下痢　トフ
胃痙攣　ヘ
盲腸炎　ホ・ヘ・ト・ク
腹の病一般　フ「フは一般萬病に應用して特效あり」
喘息　イ・ロ・ハ・ニ・ヘ・ツ
肺炎　イ・ロ・ハ・ニ・ホ・ヘ・ネ（輕く行ふ）
肋膜炎　ハ・ニ・ホ・ヘ・ネ
肺結核　イ・ロ・ハ・ニ・ヘ・ネ

心臟病　イ・ハ「ネハ其中特ニ・ネに心臟部」
動脈硬化症　ル「特にイハニ」フ
血壓亢進症　ハ・ニ
腎臟病　イ・ヘ・ヨ「但しキは左ク・キ右の二點」
膀胱炎　イ・ヘ・ト・チ・リ・ヤ
寢小便　ベ・ト・リ・ヤ
子宮病　ベ・ト・チ・リ・ヤ・ケ
卵巣炎　ベ・ト・オ・ヤ・ケ
不感症　ベ・ト「特にチ・リ・トチ」フ・ヤ
月經困難　ヘ・ト・チ・リ
乳不足　ル（特にニ）ネ「乳部の周圍」
遺精夢精　ヘ・ト・チ・リ・フ・ヤ
陰萎早漏　ヘ・ト・チ・リ・フ・ヤ
脚氣　ヘ・ト・チ・タ・レ・マ
糖尿病　ロ・ヘ・ヌ・フ・ラ・ム
惡寒　ホ
手の病一切　ロ・ハ・カ・ワ・ナ
足の病一切　ト・チ・ソ・マ
背椎カリエス　ル（特に患部）
痔の病　ト・チ・リ・ヌ
腰の痛　ネ・ノ・ヤ・ク
　　ト・チ・ヨ

―附―

無病長壽健康法　ル「特にイロトチ」フ
性能增進若返法　ヘト「特にチリ」フ

しさ。ふから問題ではないが、難症でも一二回で奇蹟的の効果を現はしたり、一二週間で全治した實例も多いのであるから。本指壓を信頼して治療を繼續するならば、他の多くの治療法をなすに比して比較にならぬ程的確且つ短期間に全治するに至ることが保證出來るのである。それ故難病であればある程病者は中途で治療を中止せず、根氣よく氣永に治療して全快の喜びを得られんことを切望する次第である。尚萬一病氣全快後再發の場合は、二三日と捨て置かず直に治療すれば數回で全治できる。

無藥發熱指壓療法秘傳

定價壹圓

昭和十五年三月十一日印刷
昭和十五年三月十八日發行

著者檢印

不許複製

編輯兼發行者　川崎久敏　東京市麴町區五番町十二

印刷者　川崎久敏　東京市麴町區五番町十二

印刷所　正隆堂　東京市神田區錦町三ノ廿七

發行所　東京指壓療法學會　東京市麴町區五番町十二　振替東京二五四六六番　電話九段一八六一番

發賣所　朝日書房　東京市麴町區五番町十二　振替東京三五二六九番

名譽顧問男爵 野田龜喜閣下
醫學博士 泉彪太先生推薦
醫學博士 高安逸郎先生推薦

東京指壓療法學會々長 川崎久敏講述
東京指壓療法學會副會長 田野倉快泉講述
醫學士 九頭見黎樹講述

無藥醫術 指壓療術士養成

●全四卷 壓迫器附入會金共●金拾參圓七拾錢●二ヶ月卒業
●卒業證書 實力證明書及開業屆書 取締解說書等無代授與

無藥醫術としてある指壓療法は現代醫療界に一大衝動を捲起し其警異的奇蹟的に民間療法を風靡しつゝあるこの小冊子にても證されるが如く醫者や藥で治らぬ難病個疾もこの意外に早く全快するので今や全國的に新開業者續出、此の療法は男女誰れにでも容易に短期間で而もこの僅かな金で自宅に於いて通信教授が受けられ、修了者は全國何處でも無試驗公認開業許可せられ尊敬されつゝ醫師に劣らぬ收入得らる本邦唯一の指壓療法講義錄で療術師養成の通信學校である。

しかし近き將來には厚生省令として試驗制度の法案が施行される筈であるから無試驗許可の今の中に開業をなし既得權を獲得して置く事が最も得策である。

●見本付會則三錢切手封入申込次第進呈●

東京指壓療法學會

通信授業 東京市麹町區五番町二一 電話 振替 東京二五四九六番 電話 九段一六八一番

終